

第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」②

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

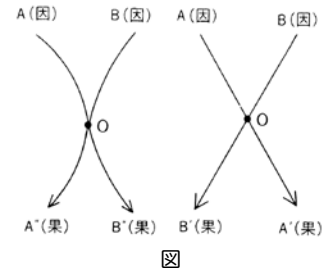
第2節 「萃点」と必然と偶然

南方熊楠は8～9歳のころから20～30町も歩いて蔵書家に百冊を超える本を見せてもらい、読み覚え、帰宅して反古紙に書写したといわれる。『和漢三才図絵』105巻を3年がかりで写し、『本草綱目』、『諸国名産図絵』、『大和本草』、『太平記』全50冊を12歳までに写本した驚異的な記憶力を持った「歩く百科事典」といわれた神童であった。生家は熱心な真言密教の信者であり、父は熊楠を和歌山中学へ入学させるが、学校が嫌い動物や植物をとり山に登り、登校には熱心ではなかったようだ。しかし、その間『漢訳大蔵経』2千冊、7千巻を読破摘録し、博物学、解剖学にくわえて、タイラーやフレイザーの人類学、ヴィダスハイムの解剖学その他を片っ端から原書で読みこなし、痛烈に批判している(平野威馬雄『大博物学者—南方熊楠の生涯』リポート、54頁)。英語は高橋是清に学び、1884年には東京帝国大学の前身である大学予備門の試験に合格した。同期生には、夏目漱石、正岡子規、山田美妙齋などがいたが、この頃も学校を休んでは上野図書館に通い、思うままに和漢洋の書を読んだという。熊楠はおかえ教師であるフランス人の教える体操が気に入らず、体操は皆欠席であった。1886年、「頭痛はなはだし」く、「疾を脳竇に感ずるを持って」大学予備門を20歳で中途退学して、和歌山へ帰る。その年の12月22日横浜を出港して、翌年の1月7日サンフランシスコに到着し、パシフィック・ビジネス・カレッジに入学したが面白くないので退学。8月、ミシガン州ランシング州立農学校に入学するが、これも88年に退学して、アンナパーに行き、図書館で読書、野外で動植物の標本採集に専念、91年フロリダ州ジャクソンビルで菌類、地衣類藻類採集、キューバ、ハイチ、ベネズエラ、ジャマイカ島などで、動植物を採集。93年、27歳で大英博物館東洋関係資料の整理を助け、勉学の機会を得る。この年の10月『ネイチャー』に、初めて熊楠の20カ国語に及ぶ出典脚注をほどこした「東洋の星座」が掲載され、以後同誌に投稿がつづく。このころ世界初の宗教者会議であるシカゴ万国宗教会議に出席後、マックス・ミュラー等に会うために渡英していた僧侶土宣法龍(1923)に出会う。土宣は帰国後、高野山真言宗の管長になるが、氏は往復書簡を通して熊楠の思想を最も深化させた密教学者でもあった。柳田国男との往復書簡集は出版されているが、法龍との往復書簡集は膨大でいまだにすべてが整理刊行されていない。熊楠は英国誌『ノーツ・アンド・クイアリーズ』に323篇と『ネイチャー』誌に50篇の英文論考を投稿している。熊楠はこのような英米での独自の遊学生活を14年間送った後、1900年に帰国する。以後、郷土和歌山県に住み、1904年から亡くなる1941年までの37年間は田辺に定住した。1929年には、昭和天皇が田辺湾にお召艦、長門で神島を訪れ、熊楠は神島の林中をご案内したのち、長門船上で粘菌などのご進講を行い、粘菌の標本110種などを献上している。

さて、法龍との書簡にあらわれた「萃点」という語については、漢籍にはなく鶴見和子によれば熊楠の造語であろうという。「萃」とは拔萃(抜粋に同じ)とか使われることからわかるように、「あつめる」の意である。鶴見はさらにそこから「萃点移動」という観点を導く。ここには、単一の因果律から逃れ、複数の価値観を持つと苦悩し、近代の「知」の枠組みを超えようと苦闘する人々への、時代を先取りした熊楠の再評価の方向性が鮮明になされていると思われる。中沢新一は『森のパロック』のまえがきで、「熊楠は、深い森の中にあるとき、顕微鏡下の粘菌の生態を観察しているとき、しばしば宇宙的な放心状態に陥っている。そのとき、

彼の内部にわきあがってきたさまざまな心像が、南方マンダラと呼ばれる思想モデルに結晶したのである」と言い、そこに内蔵されている思想的可能性の主題を、大きな交響曲にまで発展させてみようと思つたと語る。

19世紀の西欧の自然科学の目的は、因果律を把握することであった。因果律とは、原因と結果の関係、形式的には、Aという条件群の下に、Bという現象がかならず起こる、AがあつてBがおこらないことはない、という関係を意味する(『南方熊楠・萃点の思想』鶴見和子、102頁、図の右)。



図

結果があれば、必ずそれに対応する原因があり、その原因に対して一つの結果が必然的に生ずる。因果関係は必然法則として解釈されていた。その最初の典型がニュートンの『プリンキピア』力学であった。つまり必然的な法則によって、たとえば巨大な宇宙のなかの太陽や諸惑星の天体の動きは説明されていた。それにたいして仏教の世界観である因果律は「因縁」ということばでとらえられている。因縁の因は、西欧の科学が追及している因果律の問題である。しかし、「縁」は「偶然性」を意味している(図の左)。ところが1930年代になって量子力学が出てきて、相対性原理は個々の素粒子の動きは因果律の必然法則だけでは説明できない偶然によって支配されていることが証明され、偶然によって支配されている個々の素粒子を大量観察したときに、初めて必然法則が成り立つという考え方が出てきた。すべての現象が、それに先行する諸条件と因果的にむすばれている、という言い方での因果律は反撥することのできない正しさをもっている。しかし、科学史家の村上陽一郎は、その正しさには逆に空虚な意味内容しか認められないと印象的なコメントを述べる。「我々にとって問題なのは、現象と現象との間に因果関係がある、ということではなく、どのような因果連鎖があるのか、ということからである」と言い、「因果連鎖に結ばれない現象群が、「現在」を構成する、とは言えるであろう」と述べた背景には、仏教の「縁」思想の意識がわたくしには何われる(山崎正和+市川浩編『現代哲学事典』講談社現代新書、75頁)。

今後の作業は、神話化された熊楠をもう一度19世紀後期から20世紀前半に生きた等身大の研究者として位置づけることであり、彼を祭り上げるのではなく、彼の中に胚胎していた可能性(彼自身がそれを十全に活かさざることはもとよりできなかった可能性)を私たち自身の仕事として、継承し、活かしていくことに他ならない。そうした作業の指針として、鶴見の『南方熊楠・萃点の思想』はさまざまに有用な助言を、端的に述べている刺激的な1冊であるとの評価をうけている。

熊楠のロンドンにおける奇行は数々あるが、孫文が米国を経て英国に亡命中、幽閉中の孫文を清国公使館の地下室から友人と二人で深夜に救出し、英国脱出をたすけ、生涯親交があったことはよく知られている。体操が苦手な大学予備門を退学したことなどから、全生涯が徹底した独自の共同幻想的な実践論理で貫かれていたということは、次章で取り上げる『邪宗門』の天才作家高橋和巳の天理教修養科中退理由や京大助教授辞職などの「事」的事件と重なるところがあり興味深い。「萃点」の思想にたどりついた熊楠も「ふでとりがくにん」として天に捉えられたモデルの一人とみられる。